

電気の恩恵

学習院中等科二年

田口

大哲

「ん？」

それは、とても暑い日だった。僕は、いつものようにログを監視しつつ、セキュリティタイプのログラムの改善を図っていた。珍しく画面の描画が少し遅れた気がした。次の瞬間、通常の何十倍もの速度でログが進み始めた。しかも九割ほどが赤い文字だ。これは、誰が見ても緊急事態。僕は、すぐに本社に連絡する。「現在、不正アクセスが異常なほど多いため、一時的にポートを閉鎖します。」画面を見る。ポートを閉じた人工知能のログには一つのネットワークエラーが表示されているだけ、のはずだった。しかし、大量の不正アクセスの通知は未だ消えず、さらに増えている。少しでも早い対応をしなければ……。「やるしかないか。」この手で、人工知能を一度落とすしかない。僕は、見方によってハッキングにも間違え

られそうな大量のコマンドを打ち始めた。

二十一世紀中頃のある日。僕は、強固なセキュリティと人工知能開発に特化したDIA MONDという言葉を使い、人工知能のプログラム
の改善と修復を行うベテランプログラマーとして働いている。この頃のコンピューターは、高性能で高セキュリティ。低電力をうたっているものの、膨大な量の電気を使う。そして、回路を密集させているスーパーコンピュータの冷却システムは本体同様に重要だ。冷却が間に合わずに処理が滞り、この非常事態に陥った。昔以上に電気は不可欠なのだ。人工知能が社会を支える時代、日本では風力を利用したセーリング型の浮体式洋上発電を採用している。地震の影響を受けにくく、海に囲まれた地の利を活用できるので、安全に安定して十分な電気が確保可能になった。

そんな世界を妄想しながら、中学生の僕は、今日も電気の恩恵を存分に受け、夜も明るい部屋で趣味のプログラミングに没頭している。